平城宮跡第１３６次発掘調査現地説明会資料

昭５７．３．２０　中村友博
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では，推定「第１次朝堂院」地区の発掘調査を継続的に行なつてきた。その結果，第９７・１０２・１１１次の各調査によつて朝堂の様子が，第１１９次調査によつて南門の存在が確認された。そして，第１次朝堂院地区の東西規模は約７２０尺（２１５ｍ），第１次大極殿と推定されている地区の南面中央門とこれに取り付く築地回廊から第１１９次調査で検出した南門までの南北距離は約９６０尺（２８５ｍ）となることがわかつた。今回の第１３６次調査は，朝堂地区の東南部の様相についての知見を得るために実施した。

１　地形および遺構の概要

発掘区周辺の地形は，北が高く南が低い傾斜地で，東方は第２次朝堂院地区との間を走る谷筋にあたつている。

検出した主な遺構は，建物１，塀４，溝６，石組の暗渠１などである。これらの遺構は次の３時期に大別できる。

Ａ期　この時期の遺構はＳＡ９１９９，ＳＡ８４１０，ＳＤ３７６５がある。ＳＤ３７６５は素掘りの南北溝で幅約２ｍある。推定第１次朝堂院の想定中軸線から東に約１０３ｍ（３４０尺）の位置にある。ＳＡ８４１０とＳＡ９１９９は掘立柱の塀であるがともに柱痕跡がない。このことは，ＳＡ８４１０が中軸線から約１２０ｍ（４００尺）に位置していることから，当初東西８００尺で区画する塀として計画されていたものが，柱掘形を掘つた段階で設計変更し廃棄されたものと考えられる。ＳＡ９１９９はＳＡ８４１０に対応する南面の塀である。

Ｂ期　朝堂院の東を限る掘立柱の南北塀ＳＡ５５５０Ａと東西塀ＳＡ９２０１Ａによつて朝堂地区の区画が完成する。ＳＡ５５５０は，第１１１次調査によつて，塀Ａ→塀Ｂ→築地Ｃの３時期の変遷が考えられているが，今回の調査では上面が削平されていて塀Ａのみを検出した。ＳＤ３７６５は埋められて，ＳＡ５５５０Ａの東約１８ｍの位置にＳＤ３７１５が基幹南北排水路としてつくられる。ＳＸ０３はこれにかけられた橋の可能性がある。

Ｃ期　ＳＡ５５５０が築地塀となる時期で，この下を東西溝ＳＤ９１７１Ａが凝灰岩切石組の暗渠によつて東へ流れる。また，発掘区を北から南へ直進し途中で東へ斜行する南北大溝ＳＤ０２が掘られ，南北棟建物ＳＢ０１が建てられる。

以上の各時期は，これまで実施された調査の成果を踏まえて，Ａ期は平城宮の創建期に，Ｂ期は神亀（７２４）から恭仁遷都直前まで，Ｃ期は還都後（７４５～）に比定することができる。

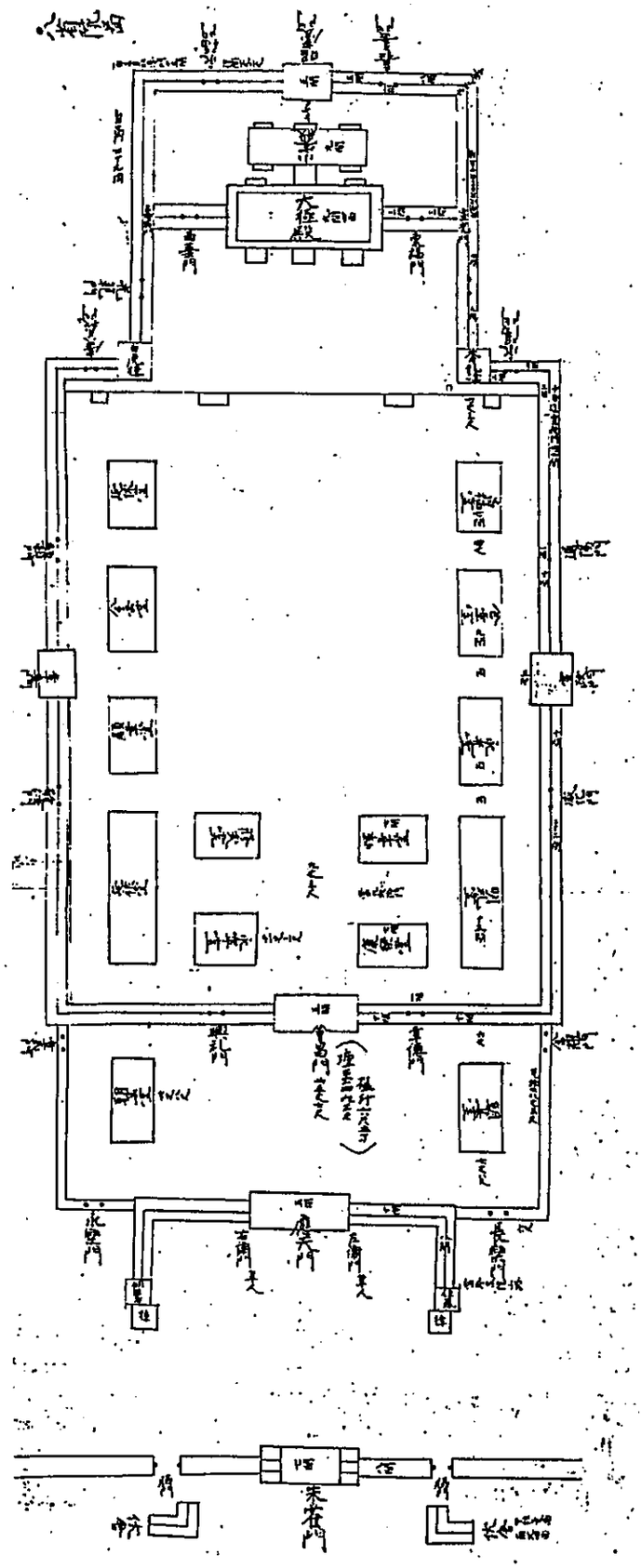
２　出土遺物

土器の出土はあまり多くないが，須恵器の完形に近い甕や硯が出土した。また「□川国」「供養」「弾正」と墨書したもの，「忌　八□」とヘラ書したものもある。南北大溝ＳＤ０２からは天平宝字(762～63）頃のものを中心に宝亀年間頃の土器が出土した。

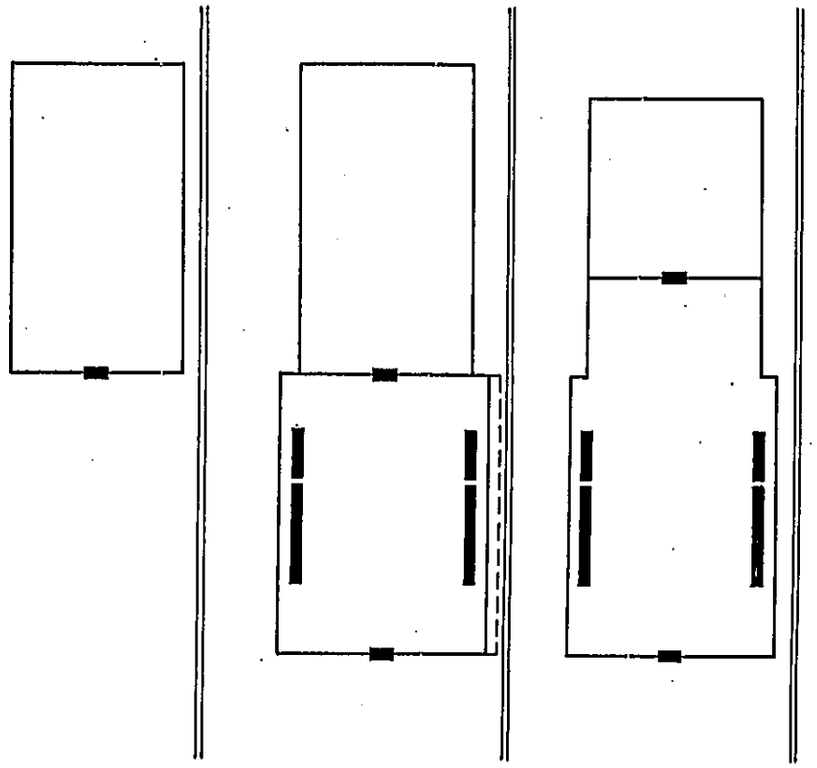
軒瓦は総数２９０点出土した。ＳＤ９１７１Ａからは藤原宮式の瓦が多数出土し，その中には完形品も多い。ＳＤ０２，ＳＤ３７１５からは平城宮Ⅲ期（天平末～天平勝宝年間）の瓦が出土している。

３　まとめ

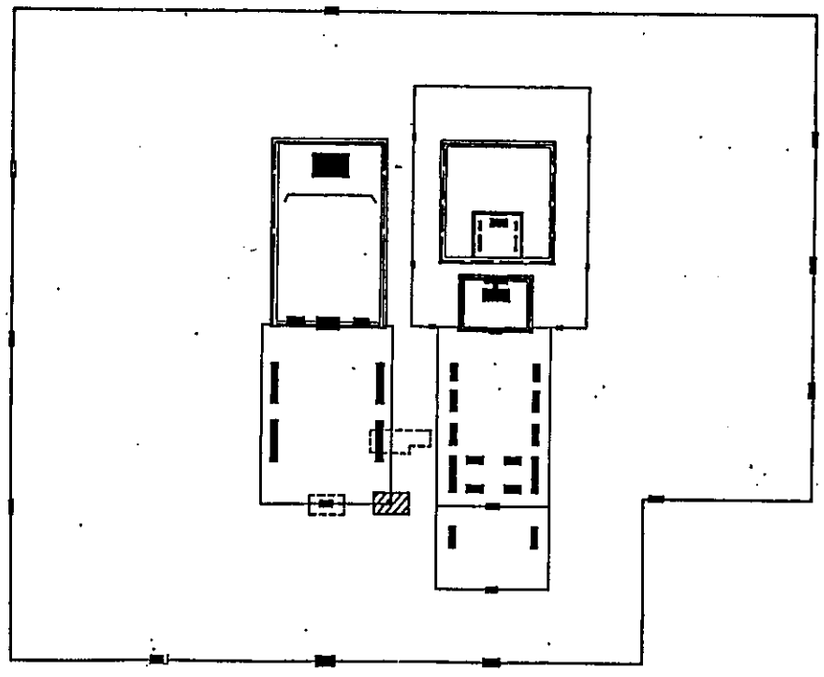
今回の調査によつて，朝堂地区の東南隅は塀によつて閉じられ東を限る塀はこれ以上南には延びないことが明らかとなつた。従つて，朝堂地区は東西２１５ｍ，南北２８５ｍとなることが確認できた。第16・17次調査によつて，平安宮朝堂院の南の正門である応天門に相当する位置に門は存在しないことが知られているので，もしも朝堂地区の南に朝集堂が存在したと仮定すると，推定第１次朝集堂地区の建物の配置は藤原宮とよく似ていることになる。また，今回検出した南北大溝ＳＤ０２第111次調査の際に東第二堂の東部で検出されていないので，今回の発掘区より北でどのようになつていたのか注目される。



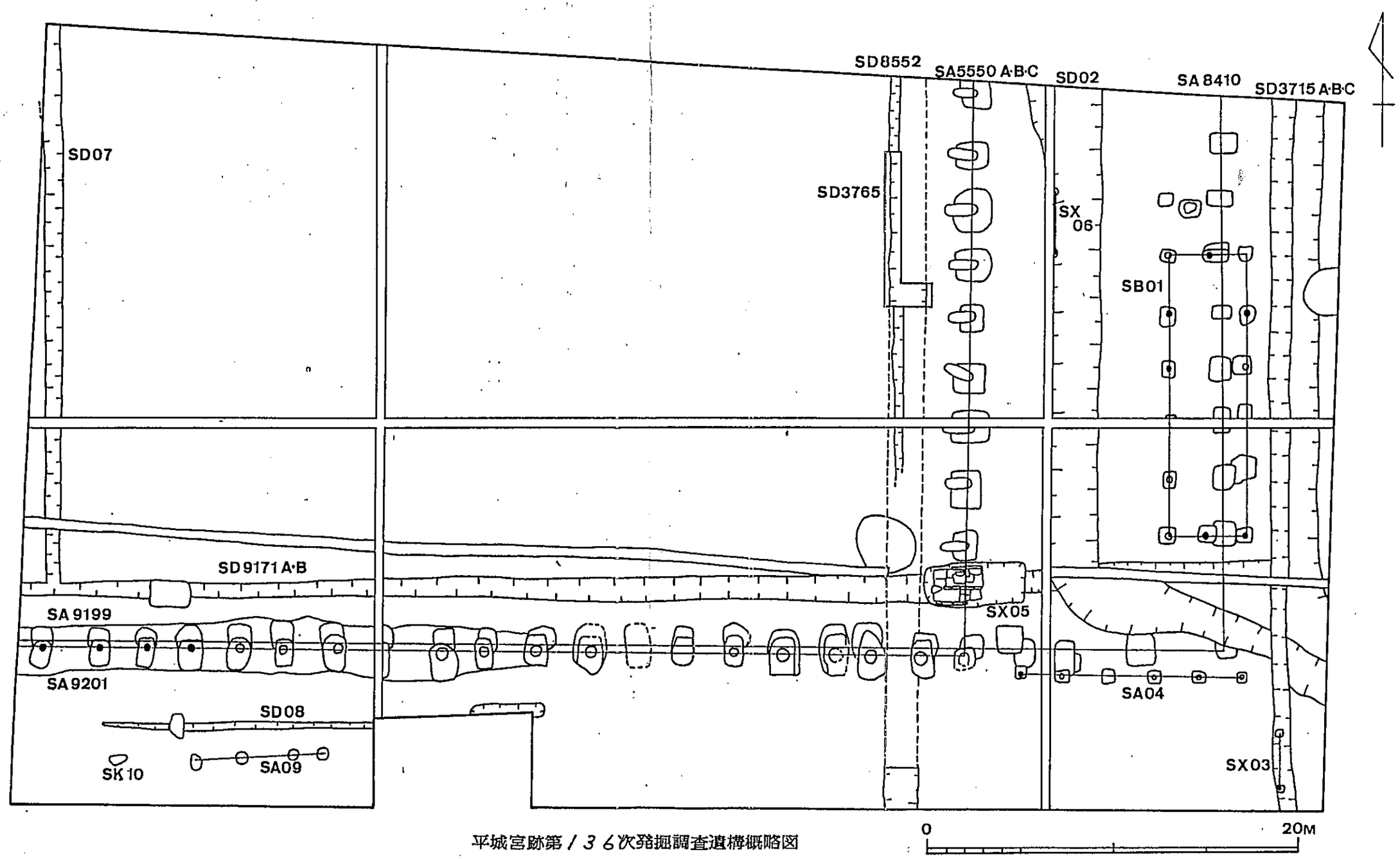
平安宮八省院図（陽明文庫本）



推定第１次大極殿・朝堂院地域変遷概略図



第１３６次調査位置図



平城宮跡第136次発掘調査遺構概略図